

協力隊で学んだ相手のことを思う気持ちを大切に

平成26年10月から2年間
青年海外協力隊員としてウガンダに派遣

遠藤 久美子 さん

インドウ・ウミコ 27歳 〓五日市4区 〓



平成元年生まれ。電気通信大学を卒業後、臨時講師として西根中学校に1年間勤務。その後、青年海外協力隊として平成26年10月からウガンダへ派遣される。現地の中学校で理数科の教育に2年間従事し、帰国。

「小規模校で生徒一人一人のことを知れば知るほど現地を教えるということの難しさを痛感しました」と感慨深げに話すのは、青年海外協力隊としてアフリカのウガンダに2年間赴任した遠藤久美子さん。現地では、中学校の理数科講師の助手を務めました。

「ウガンダに行く前は、私が教えることで現地の生徒の勉強の仕方が変わり、その影響で地域一体が劇的に変わるのではと想像していました。現地では指導に当たっていると、日本との教育方法の違いに悩みました。また、協力隊の支援と現地教師の雇用のバランスをとることも課題の一つだと感じました」と、苦戦した日々を振り返ります。

そこで久美子さんは、ここで私にできることは何だろうと考え、本来の活動である理数科の指導と併せて、生徒の親御さ



現地の学校の授業で理科の実験内容を説明する久美子さん

んが迎えに来たときには「この子は掃除を一生懸命頑張っていますよ」と学校での様子を伝えるなど、現地の先生と生徒、学校と家庭をつなぐ役割を見いだしました。

西根中学校での講師経験もある久美子さん。「勉強を教えることも海外支援を行うことも、まずは相手のことを知り、相手の立場になって行動することが大切だと感じています。協力隊の経験で得たことを今後の人生に生かしていきたいです」と前を向きまします。

編集後記

▽松川一の宮太鼓の取材で、昨年暮れから何度か杉の子保育園を訪問しています。子どもから大人まで練習に励んでいる姿や、太鼓の響き、息がピッタリ合った迫力のある演奏に、胸が熱くなりました。小・中学生で構成される「はな組」の皆さんは、来月行われる全国大会を控えています。真剣な表情で太鼓を叩く姿に意気込みを感じました。全国大会で優勝するよう応援しています。そして、結成30周年記念演奏会、今からすぐ楽しみます。

▽国体が終わり一安心していたのもつかの間、1月の人事異動で団体推進室から広報広聴係に配属になりました多賀です。早速、平笠裸参りやスキー大会などの取材にかけ、出来はさておき、数だけはシャッターを押しています。これからたくさんイベントにでかけ、市政や地域の情報をみなさんに分かりやすく伝えられる広報にしたいと思っています。取材先で見かけましたら気軽にお声かけください。よろしくお願ひします。◎

▽「オーディナリー」という言葉。聞き慣れなくて頭に？が浮かんだ人もいたかもしれません。▽地味で目立たないけど、地道に日々まじめのために頑張っている人の姿を見て「並な苦労や努力ではないな」と思いました。が、取材先で話を聞いてみると、活動すること自体を楽しんでいたり、当たり前のことだと生活の一部に溶け込ませている様子。本当に尊敬します。◎